

第3回学校評議員会記録

開催日時	令和4年（2022年）2月8日（火） 10時00分～11時30分	
会場	校長室	
出席者数	学校評議員5名中2名（3名はオンライン参加）	学校 校長、副校長、教頭、事務長
次第および校長が意見を求めた事項		
1 開 会		
2 校長挨拶	<p>今回の開催にあたり、第2回に続き集合とオンラインの併用にご理解いただき重ねて感謝申し上げます。この間、本校においても職員が感染し、児童生徒の中にもPCR検査を受ける方が出てきている。オミクロン株の影響があるが、幸い感染には至っておらず臨時休校を取らずにすんでいる。これも児童生徒並びに教職員一人一人の感染症対策対応等の意識の高さや徹底した管理があつてのことと思つている。以前もお話したが、学校の取組として実施するために何をするか、それからどうしたら実施できるか、「with コロナ、after コロナ」を考えて「今までやってきたから」なく、目的それから必要性を踏まえて改めてどのように取り組んでいくかを考えて実施可能な検討というところでき取り組んでいく。学習活動等については学びの保障を重視した取組を今後も進めていきたいと思つている。</p> <p>本日は、本年度のまとめ並びに令和4年度に向けたご協議をしていただきたい。</p>	
3 報告・説明事項		
(1) 令和4年度に向けた取組（校長）	<p>令和4年度に向けた取組としては、常に自分のこととして参画意識・課題意識をもって考えていきたい。令和3年度に向けてはこれからの帯広養護学校を自分ごととして考えるということで教職員には話してきた。令和4年度は、常に自分の参画課題意識として考える意識をもって取り組んでいただこうと考えている。本校グランドデザインの評価改善等について、中身については学校評価の中で各学部及び分掌の中で評価をいただいている。今回教職員に評価・改善してもらったことは、グランドデザインの文言をどう考えるかということで教職員にアンケートを行った。今年度グランドデザインとして作成し、学校評議員の皆さんからも見やすさが大切ということをお伺いしているとおり、簡潔に表記したことで職員の意識付けがされ、活用も充分されてきたと評価している。その中の文言のアンケートについて、多くの職員に提出していただいた。回収率は小学部27/39で回収率が66%になった。回答についてはたくさんあるので、資料をつけさせていただいた。建設的な意見をたくさん出していただいたので、内容を吟味しながらグランドデザイン及び解説に反映して、2月の職員会議で示していくように考えている。</p> <p>グランドデザインの中でこれまで「目指す子どもの姿」としていたところを、「目指す児童生徒の姿」に変更しようと考えている。背景として4月からの成人年齢引き下げを考えると、「子ども」という表記が妥当かどうかあったので、「児童生徒」と来年度は変更していきたい。</p> <p>次に「自分の言葉で理解、表出できる子ども」の項目に、この言葉ではどうかという意見が結構出ていた。言葉を指すときに発語だけではないことを、教職員により意識してもらえよう、内言</p>	

語や言語行動などを全て含めて言葉という表現をしていくということを、もう一度教職員に周知をしていき、全ての言語を意味していることをもう少し意識付けをしていきたい。

重点教育目標の「社会参加自立につながる12年間の積み重ね」では、この12年間の例えば本校の小学部1年から高等部3年までであると12年間だけれども、例えば転校してきたとか中学部から入学したとか高等部から入学して3年間というように考えると、12年間ではないところはある。しかし児童生徒の小学校1年生から高校3年生を卒業するまでを12年間で考えたときに、途中から本校に入学してきてそれまでの積み重ねがあるので、そこを踏まえた12年間というところの意識付けを図っていきたいと思っている。このほかにも教職員からたくさん意見が出されたことを参考にしながら考えていきたい。

「人権尊重」に関しては今年度もかなりの部分で教職員に伝えてきて、年齢相応の対応や言葉のことで教職員に話をしてきた。今後もより一層、発達段階や生活年齢に応じた対応や関わりの徹底、児童生徒が中心にいることを再度教職員が意識をしていくこと、そして相互牽制を含め児童生徒への言葉掛けや指導はどうだったのかをみんなで考えていけるようにし、体罰や不適切な指導・言動のない学校となるよう全員で取り組むことを再度徹底していきたい。

児童生徒の呼称の徹底ということでもかなり話してきた。児童生徒を呼び捨てにすることは大分なくなり、「さん」付け「君」付けが見られるようになってきた。あだ名で呼ぶこともなくなった感じはあるが、「ちゃん」付けがなかなか直らないところがある。小学部1年の段階から「ちゃん」付けで高校生になっても同じように呼んでいるところがあるので、これまで「ちゃん」付けをやめ」という表記してきたところを、少し極端ではあるが、「ちゃん」付け禁止というように教職員には伝えて行こうと考えている。教職員には、保護者が「ちゃん」付けで呼んでいるから同じように呼ぶという考えもあるが、それは家庭の呼び方であり、児童生徒が今後成長する過程で「ちゃん」付けでは育っていかないため、学校では再度呼称を徹底していきたい。

肯定的な言葉掛けに留意することでは、丁寧な言動を再度設定することに伴い、否定的命令的強制的それから感情的で乱暴な言葉掛けや小馬鹿にするような発言をなくすことに取り組んでいきたい。

教職員間の連携・協力・共有しあうところでは、児童生徒のために同じ方向性をもって取り組んでいけるようにしていきたい。また、しっかりと意識をもって目配り気配り心配りをもって児童生徒や同僚を尊重できるよう指導を徹底していきたい。

同性介助（寄宿舍女子棟への入室禁止）では以前寄宿舍の部屋の関係により、小学校一年生が女子棟の部屋を使用したりしたこともあったが、今年度からはそこもしっかり男子棟は男子、女子棟は女子という形にして男性職員の女子棟への入室もなくすことを考えている。また、指導員も極力同性介助とし児童生徒の自尊心を尊重するというに取り組んでいく。そして、絶対あってはならない性的な事故防止にも努めていく。

危機管理については安心安全な教育活動に努める上で、複数の児童生徒を意識することで児童生徒一人にしないことを挙げているが、やはり死角をなくすことや見ていなかったとか知らなかったとか分からなかったということが絶対にないようにしなければいけないことをもう一度徹底していきたい。また、複数の児童生徒を複数の目で認識するという一方で、指導中集中してしまうために、どうしても目の前の児童生徒だけというようになってしまう部分もあるが、180度の視野を

もつことでそこにいる複数の児童生徒を見る意識を常もつということが大事になる。そうすると、見ていなかった、知らなかった、分からなかったということがなくなるのではないかと思っている。全校（舎生）児童生徒を、全教職員が関わっている意識を常にもつことで、自分のクラスだけではなく、全校児童生徒が自分たちの教えている児童生徒であるという意識をもう一度もてるようにしたい。

事故防止に関して、施錠については児童生徒がいる間は飛び出しがあつたりするので徹底されているが、児童生徒の下校後についても不審者の侵入を防ぐ観点もあるため、その徹底をして行く必要がある。職員用靴箱の関係から放課後、教職員も児童生徒の玄関から職員も出入りをすることがあるので、放課後も施錠して不審者を入れない意識を全員が持てるようにしていきたい。

医療的ケアを受けている児童生徒がいるので、医療的ケアの事故のないよう徹底を図っていききたい。

適正な給食に関して、本校の食数は 300 食になっている。来年も児童生徒数は 200 人程度が見込まれる。給食指導を行う教職員が教室二人ずつ入ると、やはり 300 食ぐらいになる見込みである。極力、給食指導に入る職員については、児童生徒と同じ物を食べるようにしていきたい。

指導力専門性の向上に関して、北海道における教員育成指標をしっかりと活用していくこと、教職員同士が対話や共感し合い、共に育ち・育て合うところをもう一度徹底していきたい。また、一人一授業研究を検討していけたら良いと思っている。

進路指導のあり方に関して、後ほど進路指導部担当からの説明があるが、就労に必要な力というか社会に生きるための能力の育成に向けて先程述べた小学部から高等部までの学習の積み上げの継続性や系統性をもう一度図っていく必要があると思っている。小学 1 年生で学習していることが社会に出るときにどうつながっていくのかというところを教職員にもう一度、教育課程や授業の検討だとか実施改善の視点で図る必要がある。また、進路指導に関わる研修が、例えば中学部の進路指導が高等部の受検や中札内高等養護学校及び中札内高等養護学校幕別分校の受検というところに焦点を当てるのではなくて、その後の社会に出るために必要な進学というところもしっかりと計画の中に入れていきたい。

専門性の向上では、研修の充実ということで月 2 回の校内研修や進路指導研修も年間数回計画的立っているほか、自立活動研修では肢体不自由研修だけではなく、心理的な安定、人間形成、環境の把握という視点から情緒面も含めて自立活動の研修を図っていけたら良いと思っている。また、寄宿舎の研修もしっかりと行っていくことや、校内研究の取組をオープンにすることで、違った意見をより聞くこともできると考えられるため、成果発表や課題解決・改善のための公開授業などにも取り組んでいきたい。そして、校内の希望参加型の研修ということでも考えていけたら良いと思っている。教職員の中から決まった方が講師になるのではなく、誰もが講師になることを意識した自主的な研修会も考えていけたら良いと思っている。

コミュニティ・スクールについては、令和 4 年度から実施できるように取り組んでいる。学校運営協議会の内容や人選については、いま副校長を中心に取り組んでいるので令和 4 年度実施に向けて開催して行きたい。

校内のことに関して、道予算がかなり削減されている状況があるため、校内でも節約をかなりしていかなければいけない状況がある。しかしながら、中々節約に至らないので光熱費及び事務

機器消耗品を今年度以上に予算削減されることも予想されるので、教職員には節約をお願いしていききたい。

勤務の際の服装に関して、教職員にはTPOを考えてしっかりと心掛けていただきたいことを話している。

北海道アクションプランに関わり時間外勤務の縮減が出ているので、早く退勤することだけが目的ではなく、教材研究の準備などに充てるための時間の確保が大事になってくると思っている。そのためには、会議の検討、改善ということで職員会議を極力少なくしたり、会議のない日を設定できるようにしたりするところで、教材研究できる時間を極力設けるようにしていきたい。

学校閉庁日を設けている。夏はお盆の前後、冬は年末年始ということで取るようにしている。また、教職員の年休取得に関しては、年間15日以上を目標に取れるよう計画的に実施できたら良いと思っている。

その他アクションプランに関しては、どのようにしたらプランを実現できるかを検討するため、コアチームを立ち上げている。今後、一層の課題解決を目指していきたい。

(2) 令和3年度帯広養護学校の進路指導について（進路支援部）

本校の進路指導について説明する。最初に本校の進路指導の流れとその後卒業生の事例から見る進路先からの声について2事例ほど取り上げ、その後事業所や施設の方から寄せられた声を簡単に説明する。また、その声に対して本校では今後どのような進路指導していけば良いかを挙げさせていただく。

本校の進路指導の流れとして、まず12年間を通した本校の進路指導について述べる。

小学部では基本行動の定着を中心に指導を行っている。その指導は「日常生活の指導」として、普段の生活の中で身辺自立の確立や人間関係の基盤形成に関する力を付けるための指導を行っている。具体的には、食事・排せつ・時間の概念・掃除など基本的な生活習慣の定着を図って指導している。

中学部では、生活意欲を育てることを中心に「生活単元学習」の中で生活の目標や課題に沿って授業を計画し、進路指導を進めている。自分を表現したり自分の考えを伝えたりすること、社会を少し意識して社会の中でどのように適切に生活することができるかということをしつづ取り入れながら、生活する力を育てていくことを指導している。

高等部では、働く意欲を育てるための作業学習を中心に、仕事をする中でのマナーや言葉遣い、ルールを理解することなど、仕事に必要な能力を身に付けて行けるよう指導している。その中には、自分で選択することや自分の意思を伝えることなど、中学部で学んだことを基に、自分で選択決定をして伝えていく力を伸ばすための指導も行っている。この段階では、卒業後社会に出た後に自分がどのように生きて行きたいかを意識できるような指導もしている。12年間を通して卒業後社会参加して、それぞれが自立し自分らしく生活していくことを最終的な目標として進路指導を行っている。

次に小学部の進路指導について具体的に述べる。「元気に体を動かす」「周りのことを自分からする」「生き生きと学ぶ」「感じたことを表現する」「みんなと仲良くする」の五つの柱を立てて取り組んでいる。低学年ブロックでは、一日の流れを確立するなどの生活のリズムをつくること、

興味関心を広げること、そして友達を意識して一緒に行動し活動していきけるように指導を行っている。中学年ブロックでは、低学年ブロックで学んだことを一段階上げて、基本的な生活習慣の定着、興味関心をもったことを体験したり経験したりする、最後に友達と協力して物事を行うということを指導している。高学年ブロックでは社会性の観点から、自分から何かやりたいことや気持ちをもつとともに、友達と協力して一緒に何かを行っていく能力、基本的な生活習慣の確立、相手の気持ちを受け止め、他者理解ができる力を育めるよう指導をしていく。

次に中学部では、学部行事で高校の見学9月には職場実習体験学習などを3年間通じて設定している。また、授業でも週に2回作業学習を設定しており、働くことを徐々に意識していくカリキュラムとなっている。中学部の3年間を通して、今後自分はどのように生活していきたいかを考えながら、職場実習体験学習を通して自分がどのくらい働いたりすることができるのかを意識して高校を選んでいく段階になる。将来の希望の実現に向けて、3年間を通して主体的に行動できる生徒を目標に設定している。

高等部では、3年間を通して卒業後地域社会の一員として充実した生活を送るために必要な能力を育てることを進路指導の目標に設定し進めている。具体的な1年間の流れとしては、6月及び9月に現場実習を設定している。また、普段の学習でも作業学習を週に2回設定しており、そこで働くことを学んでいる。現場実習では、校内での作業のほか、校外での作業を行う機会を年に2回設定しているので、実習を通して現在自分の働く力や生活する力がどのくらいあるのかなどの課題を1年生で発見するためにこのような実習等を設定している。その課題をこの1年間で見つめ、担任を含めて話し合いを重ねていく。2年生では、1年生で出た課題を意識して仕事に取り組む活動を行っていくので、2学年の2月には卒業後の進路先の見通しをもつことにつなげるための希望を出していただくようにしている。2月の時期に決定しないこともあるが、目標としては2年の2月に進路希望先を設定して進めていくようにしている。3年生では、6月の現場実習は2年生と同じ実習であるが、9月の現場実習は前提実習として、進路希望先での現場実習になる。前提実習は就職試験のようなもので、そこで自分がどのくらい働くことができるのか、生活することができるのかを確認する場となっている。前提実習は、学校に来て実習を行うのではなく、卒業後の進路希望先で生活する場合と同じような形での実習となるので、家から希望先まで通い、時間も学校より遅く帰宅する事業所もある。そこでどれだけ卒業後の生活と同じような実施を行い、できる力を試して実習先にその力を見ていただき、卒業後の利用が可能か判断をしていただく場としている。9月の前提実習が終了後、各施設事業所の評価をいただき、利用が可能であれば手続きを進めて卒業という流れになっていく。高等部進路の流れは、1年生から始まり、2年生の終了前までにはもう卒業後の進路希望先を決めて進めていく形になっている。高等部1回目の実習は、1、2年生の場合は一週間程度であり、3年生では要望される実習によっては2週間ないしは4週間というところもある。また前提実習に限り、進路希望先の指示に従ってその期間行うということになっている。時間についても設定されている時間があるが、学校より長い時間実習したり、卒業後実際に利用したりする時間での実習になっている。さらに前提実習では、教員の引率ではなく生徒が単独での実習が基本となっている。

本校の進路の概況として、ここ3年間の数値を出している。本校の卒業生は福祉サービスが主の進路先となっている。年に1名ほどがA型や一般就労の進路として進む生徒もいる。福祉サー

ビスの詳細では、生活介護や就労支援就労継続支援B型が主な進路先となっている。主な今までの進路先としては、主に帯広市中心の事業所や施設にお世話になっているが、帯広市であっても近郊の音更町や幕別町の事業所施設を進路希望先として利用している方もいる。

卒業生の事例から見る進路先からの声を紹介する。生活介護事業所に通うAさんの例では、朝のミーティングの際、「今日何しますか」と言われて中々自分で決められないため、その後の活動にも影響が出て事業所としては困ることがあった。学校も入りながら相談を進めた。自分で声を出して言えなかったら事前にホワイトボードなりに書いて伝える方法で支援を進めた。この方法で行くと、自分もできることが分かり、朝確認するときには自分のやりたいことをホワイトボードに書いて発表することで良い流れができ、その後は午後の活動にも良い影響が出てきた例である。この課題から、自分の意思をしっかりと伝えられないので事業所からは在学中に自分が何をやりたいか伝えられるようになること、もし伝えられないのであれば伝えられる手段をもって卒業後の進路先に来ていただけるとありがたいとの声をいただいた。事業所の声として進路先からの声をいただく中で特にあるのは、学校と違い1対1での対応は難しいこと、身辺自立の確立、自分の意思をしっかりと伝えられるようになること、自傷や他害がないような生徒をお願いしたいとの声が多い。このような事業者の声を受けて進路を充実していくために、卒業後の進路を意識した授業、社会資源を活用した体験活動の充実、卒業後の進路を見据えた12年間の系統的、段階的な指導を掲げて進めていくことが大切であることを申し上げ、説明を終わらせていただく。

4 評議事項

(1) 令和4年度に向けた取組に関して

(学校評議員)

第一印象は、とても丁寧な対応をしていることである。これからの学校の教育方針としては、このような定着したやり方をこれからも続けていただくようにすることが大事であると校長の説明を聞いたときに感じた。今後もしろいろと頑張っていただきたい。

(学校評議員)

説明を聞き、非常に良いと思った。児童生徒の呼称の徹底について中々難しいかと思うことはあったが、呼び捨てやあだ名をなくす方向性をもって進める中で減少しており、大変良いと思う。「ちゃん」付けについては、どうしても1年生のときから入ってその名残が残ることは、仕方ないと思うが、児童生徒の人権を尊重するためには「さん」付けの徹底をしていただきたい。同性介助を基本とすることについては、女性職員が男子児童生徒の介助をすることは仕方ないと思うが、男性職員が女子児童生徒を介助することは、あってはならないと思う。

(学校評議員)

まず、グランドデザインの評価改善のところである。教職員に対して行った回収率を集約したものについて、普段の割合で出してみたら小学部は69%、中学部は64%、高等部になると58%になっていて、意外と寄宿舎の人達がたくさん答えている状態になっているのを見たときに、グランドデザインがどのように教職員に浸透しているのかが、回答を見ても少しピンと来てないところがあると思って見させていただいた。例えば、いくつか読ませていただいていると、障

がいがかなり重い児童生徒や生活面に課題がある児童生徒については、グランドデザインの内容について非常にレベルが高いと感じるところもある。グランドデザインを作成することは大切なのだが、現実との差がすごくあるように思ったりもしたので、回答していない、逆に言うと回収率 66%なので残りの 40%ほどの教職員がどのように感じていたのかが、やや気になったところではあった。

先ほど言葉の話が出ていたところでは、その言葉、表現することについて言語以外のところでの表現もあるように上手に話されていたが、本当にそうだと思っており、もしかするとその言葉という表現を漢字で示しているので余計に硬さがあるように思った。例えば、ひらがなで「ことば」とするとか、感情を表出できるとか意見を表出できることを考えたときに、児童生徒の現状に合わせた表現に少し変えていくということも必要であると思った。せっかく掲げているものがあるのだけれども、中々難しさもあるように少し思ったので、もし教職員がどのように考えているか把握していることがあれば、その話も少し聞きたいと思った。

(学校評議員)

保護者と子どものことを伝え合うときに、あたたかいのか「〇〇ちゃん」っていうことがいいのかという、そういうところでやっぱりいろいろと検討したときに、その子のことをしっかり見ていた中で子どもの呼び名や呼び捨てはしないというようなところを大事にしていくところを伝え合いながら取り組んできたときがあった。また、子どもに対しての乱暴なことばであるとか指示命令のような、どうしても「〇〇しなさい」のように言うことが多かったと振り返って思えた。子どもにも気持ちがあり意思があるので、どうやって子どもの意欲を育てていくかを考えることがすごく大事なことであると思い、説明を聞いていた。

(学校評議員)

グランドデザインの中で人権尊重のところについては、皆さんから出た意見と同様である。人権尊重については、本当に基本的な部分であるが、最も大事なところでもあると思っている。この人権尊重に関して、今起きているかどうかは分からないが、ベテランの教職員と経験の浅い教職員との温度差のようなところは現状から感じるものがあるのかどうなのかが、少し気になると思ったので、教えていただければと思った。

(校長)

グランドデザインに関して、表記が妥当か改善が必要かというアンケートの取り方をして、66%のうちの意見出ない方については、この表記が妥当であると評価をしている中でこの意見が書かれているので、66%のうちの 8割9割が表記は妥当であると捉えていると受け止めている。回収率が低いことは課題であるので、今後 100%に近くなるような回収率の仕方やアンケートの取り方を工夫していかなければいけないと思っている。

言葉のところではひらがなの「ことば」にすることについて大変参考になった。児童生徒の実態に合わせるのと、グランドデザインで求めるところを考えるとときの表記の仕方で難しい部分が少し出てくると思うので、レベルの高さや現実との差のところも少し比較しながら、次年度に向けての表記につなげていきたい。言葉に関しては先ほど述べたように、表出だけが言葉ではないと思っている。特に訪問教育学級の児童生徒や肢体不自由で表出言語が中々難しい児童生徒でも、まばたきや心拍数の変化など、そのようなところも大きくは「ことば」と表現することが

良いのではと思っている。どの児童生徒も同じと考えたときに、表出言語の有無によるくくりではないと考えるので、言葉を「ことば」に変えるだけでもイメージが変わると思った。大変ありがたい。

ベテランと若手の温度差については、若手の方が比較的にすんなりと「さん」付けや「君」付けをする部分はあると捉えている。本校が長い教員だとか教員年数が長い教員では、これまでこうしてきたという自負があったり、「ちゃん」付けや呼び捨て・あだ名で呼ぶことでより親近感をもてる言い方をしたりする教職員もいる。しかし、あだ名を呼べば距離が近くなるという問題でもないので、呼び方だけでその児童生徒との距離感が縮んだり離れたりすることにはならないことを、もっと意識していかなければいけないし、児童生徒が将来高校を卒業して働くときに名字で「〇〇さん」と呼ばれることが多くなることを考えると、いきなり高校卒業して山本さんと言われても誰のことか分からないことでは困ると思うので、このことも含めて小さいときから名字や名前などで呼ばれることがとても大事になると思っている。ベテランと若手に関しては、「昭和のやり方」をする教職員は少なくはなってきたが、「私のやり方」という教職員もいるので、その辺は少しずつ話をしながら進めていきたいと思っている。

(2) 令和3年度帯広養護学校の進路指導について（進路支援部）

（学校評議員）

進路指導の流れについて小学部・中学部・高等部といういろんな形の中で表示されて、最も細かくそれぞれの児童生徒の希望をきちっと捉えていることを、今回の資料を見て大変理解できた。進路については、養護学校ばかりでなく高校の卒業生でも高校3年間の中で本当に将来の進路を見通せるかという中々難しい問題である。今回のこの流れを見ていたときに、中学部・高等部の中で教職員が児童生徒の気持ちをきちんと捉えながら進めているように見えた。私の経験から言うと、実際に一般の人でも卒業して勤めたときに合わない方が実際にはかなりいる。少し気になったのは、卒業生の事例から見る進路先からの声、この辺をもう少しこまめに調べていただいて、本当にこの生徒が良かったのかどうかを確認して、今後の進路指導の方向性をさらに見出しに行くことも一つの方法であると思った。

（学校評議員）

進路指導の流れについて、非常に分かりやすくまとめられていると思う。その中でも就職に関しての進路指導については、いま新型コロナウイルスの関係で現場実習が非常にできづらい状況となり、教職員も大変苦勞されていると思う。また、この新型コロナで現場実習を受ける現場の方も、拡大させてはいけないことがあるため、中々引き受けていただけない現状を何とかしなければいけないと思う。卒業生の進路先の声を紹介いただいたが、学校からの情報をもっといただくと非常にありがたいこともあると思った。実際に通所して疑問があった場合でも学校の情報が参考になることも結構あるので、もう少しその方の特徴をいただくと非常にありがたいと思った。

（学校評議員）

丁寧に整理いただいたので分かりやすく見せていただいた。話を聞かせていただき、高等部に入学すると4月から進路に関することがすぐに入ってくるのが分かり、高等部では働く意

欲を育てるところがすごく強調されてくるのが分かった。また、高校の3年間で進路を決めていかなければいけないことが分かり、2年生のうちに決めておかなければいけない大変さがすごく分かった。教職員がすごく努力されていることも感じられて、現状が分かったことがあったのでお話いただいて良かった。キャリア支援のようになると、どうしてもその次のステップのところが決まることがイコールになりがちになっているところがある。キャリア支援の本を読むと、よりよく生きていくためにはどうしたらいいのだろうかという、もう少し広い概念でキャリアという言葉を見ることができると、日本の現状を見てみると進路を決めることがメインになりがちになっている。例えば、行き詰まったときにどう息抜きしようかとか、自分のメンタル面のコントロールとか感情のコントロールをどうしたら良いのかというような、働くことにプラスアルファして、その人がより豊かに生きて行くための知恵なども一緒にセットで指導できるともっと良いのかもしれないと思った。児童生徒の特徴にもよると思うので、そこがもう少し充実していくと、よりキャリアというものが良くなっていくと思った。先ほど生活介護事業所に通う方の例が出ていて、中々自分の言葉をお話できなかったというところがあったが、まさにそこが先程の言葉ともつながってくると思っており、自分のことを表現していくことの難しさと大切さがもしかすると働いている中でも出てくると思うので、働く＝もう一人前ではなくて、まだまだ発展途上の中でこうだったらいいかなということと一緒に考えていける人がいることが、サポートしていくことにもつながっていくと思った。短大でも卒業支援みたいなものがあるので、そのようなところもすごく関連すると思った。いきなりできることは中々難しいところでも、事業所にも分かっていただくことも大切なのかもしれないと思った。

(学校評議員)

分かりやすい説明をいただき、自分が今まで見てきた子どもたちが学校に入学し小学部から中学部、高等部まで上がっていく中で、社会に出て行くための準備をその年齢ごとにしていく学習に丁寧に取り組んでいることを感じられた。

私たちはあの就学前の子どもに接しているが、その年齢ごとに社会の中でいろいろな形で生活して行くところを、自分たちの中でその状況をどうやって作っていくのか、それから社会にどのように参加しているのかがすごく大事であることを改めて感じた。

(学校評議員)

進路指導については、教職員も大変苦勞されていると思っている。頭の下がる思いである。今後も引き続き、個々の個性などが生かせる進路の配慮をいただければと思っている。分かりやすい説明だった。進路先からの声の中で、少し気になる点があったのでそのことについて少し考えてみたいと思った。

5 校長挨拶

評議いただいたことに感謝申し上げます。ご意見いただいたことを今後の本校の教育に生かしていきたい。進路支援部の説明も丁寧で分かりやすいといただいているので、この説明をもっと膨らませて小学部から高等部まで生活する力・生きる力の育成を目指して取り組んでいくので今後もよろしくお願ひしたい。

なお、来年度からはコミュニティ・スクールに移行する予定である。学校評議員の皆様には一年間

の感謝を申し上げます。

6 閉 会

上記のとおり会議を開催した。

令和4年（2022年）2月8日

北海道帯広養護学校長 山 本 貴 路